

捕鯨ありのままの姿を

解体の写真集あす出版

世界で捕鯨の是非をめぐる議論が続く中、写真家の小関与四郎さん(75)がマッコウクジラの解体現場などを撮影したモノクロ写真集「クジラ解体」が30日出版される。1988年に商業捕鯨が規制される前の写真が中心で、日本の捕鯨文化を伝える貴重な資料として注目されそうだ。



砂浜でクジラを解体する捕鯨会社の作業員(写真集「クジラ解体」より)

「議論の役に立てば」

A4判208ページ、ずっしり重い。写真集の目玉となる陸での解体風景は、千葉県南房総市の和田浦港で86年に撮影。「解剖さん」と呼ばれる捕鯨会社の作業員らが、なぎなたのような長い柄の大包丁で、つやつやと黒光りするクジラの頭や、分厚い脂肪の層を切り落とす光景などを生々しく伝えている。

商業捕鯨中止が近いことを知り、和田浦港に赴いたといふ小関さん。「血のりに足を滑らせながら、クジラがみるみる切り分けられていくのを無我夢中で撮った」と当時を振り返る。

「捕鯨の是非を頭だけで判断する前に、ありのままを見てほしい。議論するための役に立つのなら出版の意義がある」と話す。

クジラへ敬意伝わる

江戸時代のクジラ漁師を描いた小説「くじら組」の著作がある作家山本一力さんの話。19世紀の米国などによる捕鯨は鯨油を採るために皮だけを使い、クジラを絶滅させかねないほどに追い込んだ。一方、日本の伝統的な捕鯨には「命をあやめる以上、血の一滴まで無駄にしない」という、信仰に近い文化がある。自分の命と引き換えにする覚悟でクジラという大型動物に立ち向かい、食べるために必要な分だけを殺し、肉、骨、皮、ヒゲまでもすべて大事に使ってきた。写真集を見たが、漁師たちのクジラへの敬意が伝わってくる。日本人がクジラにどう向き合ってきたかが感じ取れる作品だ。

三浦衛社長(53)も訴える。「ほかの生き物を殺して食べること人間は生きているという事実を見つめ、捕鯨をめぐる議論のたたき台にしてほしい」

小関さんは出版に当たり、現在も和田浦港で公開されているツチクジラの解体や、古式捕鯨発祥の地として知られる和歌山県太地町の史跡など、捕鯨にまつわる現代の風景もあらためて撮影、写真集に盛り込んだ。

と反捕鯨国の歴史的な和解に失敗。反捕鯨団体「シー・シェパード」の妨害を受け、日本側は今シーズンの南極海での調査捕鯨を打ち切るなど、混乱が続いている。大規模な商業捕鯨に反対している環境保護団体グリーンピース・ジャパンは写真集について「日本の伝統的な捕鯨文化を否定するわけではない」とコメントしている。税込み1万5750円。全国の書店を通じて注文できる。問い合わせは春風社(045・261・3168)。